



岩 波 文 庫

31-036-6

小 さ き 者 へ
生まれいずる悩み

有 島 武 郎 作

岩 波 書 店

小さき者へ・生まれいずる悩み ☆

1940年3月26日 第1刷発行

1962年10月16日 第26刷改版発行 ©

1978年10月10日 第43刷発行 ￥100

作 者 ^{あり}有 ^{しま}島 ^{たけ}武 ^お郎

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所 巖 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三秀舎 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

岩 波 文 庫

31-036-6

小 さ き 者 へ
生まれいずる悩み

有 島 武 郎 作



岩 波 書 店

目次

小さき者へ……………五

生まれいずる悩み……………二

解説……………(三上秀吉)……………九

小
さ
き
者
へ

お前たちが大きくなって、一人前の人間に育ち上がった時、——その時までお前たちのパパは生きていくかいないか、それはわからない事だが——父の書き残したものを繰り広げて見る機会があるだろうと思う。その時この小さな書き物もお前たちの目の前に現われ出るだろう。時はどんどん移って行く。お前たちの父なる私がその時お前たちにどう映るか、それは想像もできない事だ。おそらく私が今ここで、過ぎ去ろうとする時代をわらい憐れあはれんでいるように、お前たちも私の古臭い心持ちをわらい憐れむのかもしれない。私はお前たちのためにそうあらん事を祈っている。お前たちは遠慮なく私を踏み台にして、高い遠い所に私を乗り越えて進まなければ間違っているのだ。しかしながらお前たちをどんなに深く愛したものがこの世にいるか、あるいはいかかという事実は、永久にお前たちに必要なものだと思ふのだ。お前たちがこの書き物を読んで、私の思想の未熟で頑固がんこなのをわらう間にも、私たちの愛はお前たちを暖め、慰め、励まし、人生の可能性をお前たちの心に味覚あじさせずにおかないと思っている。だからこの書き物を私はお前たちにあてて書く。

お前たちは去年一人の、たった一人のママを永久に失ってしまった。お前たちは生まれるとまもなく、生命にいちばんだいじな養分を奪われてしまったのだ。お前たちの人生はそこですでに暗い。このあいだある雑誌社が「私の母」という小さな感想をかけといて来た時、私はなんの気もなく、「自分の幸福は母が始めから一人で今も生きている事だ」と書いてのけた。そして私の万年筆がそれを書き終えるか終えないに、私はすぐお前たちの事を思った。私の心は悪事でも働いたように痛かった。しかも事実は事実だ。私はその点で幸福だった。お前たちは不幸だ。回復

の途なく不幸だ。不幸なものたちよ。

明け方の三時からゆるい陣痛が起こりだして不安が家じゅうに広がったのは今から思うと七年前の事だ。それは吹雪も吹雪、北海道ですら、めったにはないひどい吹雪の日だった。市街を離れた川沿いの一つ家はけし飛ぶほど揺れ動いて、窓ガラスに吹きつけられた粉雪は、さらぬだに綿雲に閉じられた陽の光を二重にさえぎって、夜の暗さがいつまでも部屋から退かなかった。電灯の消えた薄暗い中で、白いものに包まれたお前たちの母上は、夢ごこちにうめき苦しんだ。私は一人の学生と一人の女中とに手伝われながら、火を起こしたり、湯を沸かしたり、使いを走らせたりした。産婆が雪でまっ白になってころげこんで来た時は、家じゅうのものが思わずほっと息をついて安堵したが、昼になっても昼過ぎになっても出産の模様が见えないで、産婆や看護婦の顔に、私だけに見える気づかいの色が見えだすと、私は全くあわててしまっていた。書齋に閉じこもって結果を待っているらなくなった。私は産室に降りていって、産婦の両手をしっかりと握る役目をした。陣痛が起こるたびごとに産婆はしかるように産婦を励まして、一分も早く産を終わらせようとした。しかししばらくの苦痛の後に、産婦はすぐまた深い眠りに落ちてしまった。いびきさえかいて安々と何事も忘れたように見えた。産婆も、あとから駆けつけてくれた医者も、顔を見合わして吐息をつくばかりだった。医師は昏睡が来るたびごとに何か非常の手段を用いようかと案じているらしかった。

昼過ぎになると戸外の吹雪はだんだんしずまっていって、濃い雪雲から漏れる薄日の光が、窓にたまった雪に来てそっと戯れるまでになった。しかし産室の中の人々にはますます重い不安の

雲がおおいかぶさった。医師は医師で、産婆は産婆で、私は私で、めいめいの不安に捕われてしまった。その中でなんらの危害をも感ぜぬらしく見えるのは、いちばん恐ろしい運命の淵に臨んでいる産婦と胎児だけだった。二つの生命は昏々として死のほうへ眠って行った。

ちょうど三時と思わしい時に——産氣がついてから十二時間目に——夕を催す光の中で、最後と思わしい激しい陣痛が起こった。肉の眼で恐ろしい夢でも見るように、産婦はかつと瞼を開いて、あてもなく一所をにらみながら、苦しげというより、恐ろしげに顔をゆがめた。そして私の上体を自分の胸の上にたくし込んで、背中を羽がいに抱きすくめた。もし私が産婦と同じ程度にいきんでいなかったら、産婦の腕は私の胸を押しつぶすだろうと思うほどだった。そこにいる人々の心は思わず総立ちになった。医師と産婆は場所を忘れたように大きな声で産婦を励ました。ふと産婦の握力がゆるんだのを感じて私は顔をあげて見た。産婆の膝もとには血の氣のない嬰兒が仰向けに横たえられていた。産婆は毬でもつくようにその胸をはげしくたたきながら、葡萄酒といていた。看護婦がそれを持って来た。産婆は顔と言葉とでその酒を盥の中にあけろと命じた。激しい芳芬と同時に盥の湯は血のような色に変わった。嬰兒はその中に浸された。しばらくしてかすかな産声が息もつけない緊張の沈黙を破って細く響いた。

大きな天と地との間に一人の母と一人の子とがその刹那に忽如として現われ出たのだ。

その時新たな母は私を見て弱々しくほほえんだ。私はそれを見るとなんとという事なしに涙が目がしらににじみ出て来た。それを私はお前たちになんといっているいい現わすべきかを知らない。私の生命全体が涙を私の目から搾り出したとでもいえるのかしら。その時から生活の諸相が

すべて目の前で変わってしまった。

お前たちのうち最初にこの世の光を見たものは、このようにして世の光を見た。二番目も三番目も、生まれように難易の差こそあれ、父と母とに与えた不思議な印象に変わりはない。

こうして若い夫婦はつぎつぎにお前たち三人の親となった。

私はそのころ心の中にいろいろな問題をあり余るほど持っていた。そして始終あくせくしながら何一つ自分を「満足」に近づけるような仕事をしていなかった。何事もひとりでかみしめてみる私の性質として、表面には十人並みな生活を生活していながら、私の心はややともすると突き上げて来る不安にいらいらさせられた。ある時は結婚を悔いた。ある時はお前たちの誕生をにくんだ。なぜ自分の生活の旗色をもっと鮮明にしないうちに結婚などをしたか。妻のあるために後ろに引きずって行かれねばならぬ重みの幾つかを、なぜ好んで腰につけたのか。なぜ二人の肉欲の結果を天からの賜物のように思わねばならぬのか。家庭の建立に費やす労力と精力とを自分是他に用うべきではなかったのか。

私は自分の心の乱れからお前たちの母上をしばしば泣かせたりさびしがらせたりした。またお前たちを没義道に取りあつかった。お前たちが少し執念く泣いたりいがんたりする声を聞くと、私は何か残虐な事をしないではいられなかった。原稿紙にでも向かっていた時に、お前たちの母上が、小さな家事上の相談を持って来たり、お前たちが泣き騒いだりしたりすると、私は思わず机をたたいて立ち上がった。そしてあとではたまらないさびしさに襲われるのを知りぬいていながら、激しい言葉をつかったり、きびしい折檻をお前たちに加えたりした。

しかし運命が私のわがままと無理解とを罰する時が来た。どうしてもお前たちを子守りに任せておけないで、毎晩お前たち三人を自分の枕もとや、左右にふせらして、夜通し一人を寝かしつけたり、一人に牛乳を温めてあてがったり、一人に小用をさせたりして、ろくろく熟睡する暇もなく愛の限りを尽くしたお前たちの母上が、四十一度という恐ろしい熱を出してどっと床についた時の驚きもさる事ではあるが、診察に来てくれた二人の医師が口をそろえて、結核の徴候があるといった時には、私はただわけもなく青くなってしまう。検痰の結果は医師たちの鑑定を裏書きしてしまった。そして四つと三つと二つとなるお前たちを残して、十月末のさびしい秋の日に、母上は入院せねばならぬからだとなってしまう。

私は日中の仕事を終わると飛んで家に帰った。そしてお前たちの一人か二人を連れて病院に急いだ。私とその町に住まい始めたころ働いていたこくめいな門徒のばあさんが病室の世話をしていた。そのばあさんはお前たちの姿を見ると隠し隠し涙をふいた。お前たちは母上を寝台の上に見つけると飛んでいってかじりつこうとした。結核症であるのをまだあかさしていないお前たちの母上は、宝を抱きかかえるようにお前たちをその胸に集めようとした。私はいいかげんにあしらってお前たちを寝台に近づけないようにしなければならなかった。忠義をしようとしながら、周囲の人から極端な誤解を受けて、それを弁解してならない事情に置かれた人の味わいそうな心持ちを幾度も味わった。それでも私はもうおこる勇氣はなかった。引きはなすようにしてお前たちを母上から遠ざけて帰路につく時には、たいい街灯の光が淡く道路を照らしていた。玄関にはいると雇い人だけが留守していた。彼らは二三人もいるくせに、残しておいた赤ん坊のおしめ

を代えようとしなかった。気持ち悪げに泣き叫ぶ赤ん坊の股の下はよくぐしょぬれになっていた。

お前たちは不思議に他人になつかない子供たちだった。ようようお前たちを寝かしつけてから私はそつと書斎にはいつて調べ物をした。からだは疲れて頭は興奮していた。仕事をすまして寝つこうとする十一時前後になると、神経の過敏になったお前たちは、夢などを見ておびえながら目をさますのだった。明け方になるとお前たちの一人は乳を求めて泣きだした。それにおこせると私の目はもう朝まで閉じなかった。朝飯を食うと私は赤い目をしながら、堅い心のようなものできた頭をかかえて仕事をする所に出かけた。

北国には冬が見る見るせまって来た。ある時病院を訪れると、お前たちの母上は寝台の上に起きかえって窓の外をながめていたが、私の顔を見ると、早く退院がしたいといい出した。窓の外に楓があんなになつたのを見ると心細いというのだ。なるほど入院したてには燃えるように枝を飾っていたその葉が一枚も残らず散りつくして、花壇の菊も霜にいためられて、しおれる時でもないのにしおれていた。私はこの寂しさを毎日見せておくだけでもないかと思つた。しかし母上のほんとうの心持ちはそんな所にはなくって、お前たちから一刻も離れてはいられなくなつていたのだ。

きょうはいよいよ退院するという日は、霰の降る、寒い風のびゅうびゅうと吹く悪い日だったから、私は思い止まらせようとして、仕事をすますとすぐ病院に行つてみた。しかし病室はからっぽで、例のばあさんが、もらったものやら、座ぶとんやら、茶器やらを部屋のすみでござござ

と始末していた。急いで家に帰って見ると、お前たちはもう母上のまわりに集まってうれしそうに騒いでいた。私はそれを見ると涙がこぼれた。

知らない間に私たちは離れられないものになってしまっていたのだ。五人の親子はどんどん押し寄せて来る寒さの前に、小さく固まって身を護ろうとする雑草の株のように、互いにより添って暖みを分かち合おうとしていたのだ。しかし北国の寒さは私たち五人の暖みではまに合わないほど寒かった。私は一人の病人と頑^{かんぜ}はないお前たちとをいたわりながら旅雁^{りょがん}のように南をさしてのがれなければならなくなった。

それは初雪のどんどん降りしきる夜の事だった、お前たち三人を生んで育ててくれた土地をあとにして旅に上ったのは。忘れる事のできないいくつかの顔は、暗い停車場のプラットフォームから私たちになごりを惜しんだ。陰鬱^{いんうつ}な津軽海峡^{つがるかいきょう}の海の色も後ろになった。東京までついて来てくれた一人の学生は、お前たちの中のいちばん小さい者を、母のように終夜抱き通していてくれた。そんな事を書けば限りがない。ともかく私たちは幸いにけがもなく、二日の物憂^{ものう}い旅の後に晩秋の東京に着いた。

今までいた所とちがって、東京にはたくさん親類や兄弟がいて、私たちのために深い同情を寄せてくれた。それは私にどれほどの力だったろう。お前たちの母上はほどなくK海岸にささやかな貸し別荘を借りて住む事になり、私たちは近所の旅館に宿を取って、そこから見舞いに通った。一時は病勢が非常に衰えたように見えた。お前たちと母上と私とは海岸の砂丘に行つて日向^{ひなた}ぼっこをして楽しく二三時間を過ごすまでになった。

どういつもりで運命がそんな小康を私たちに与えたのかそれはわからない。しかし彼はどんな事があっても仕遂ぐべき事を仕遂げずにはおかなかった。その年が暮れに迫ったところお前たちの母上はかりそめの風邪かぜからぐんぐん悪いほうへ向いて行った。そしてお前たちの中の一人も突然原因のわからない高熱に侵された。その病気の事を私は母上に知らせるのに忍びなかった。病児は病児で私をしばらくも手放そうとはしなかった。お前たちの母上からは私の無沙汰ぶさたを責めて来た。私はついに倒れた。病児と枕まくらを並べて、今まで経験した事のない高熱のためにうめき苦しまねばならなかった。私の仕事？ 私の仕事は私から千里も遠くに離れてしまった。それでも私はもう私を悔やもうとはしなかった。お前たちのために最後まで戦おうとする熱意が病熱よりも高く私の胸の中で燃えているのみだった。

正月早々悲劇の絶頂が到来した。お前たちの母上は自分の病気の真相を明かされねばならぬめになった。そのむずかしい役目を勤めてくれた医師が帰って後の、お前たちの母上の顔を見た私の記憶は一生涯いっしょうがい私を駆り立てるだろう。まっさおなすがすがしい顔をして枕についたまま母上には冷たい覚悟を微笑に言わして静かに私を見た。そこには死に対する Resignation とともにお前たちに対する根強い執着がまざまざと刻まれていた。それは物すごくさえあった。私は凄惨せいさんな感じに打たれて思わず目を伏せてしまった。

いよいよ日海岸の病院に入院する日が来た。お前たちの母上は全快しない限りは死ぬともお前たちに会わない覚悟の臍はらを堅めていた。二度とは着ないと思われる——そして實際着なかった——晴れ着を着て座を立った母上は内外の母親の目の前でさめざめと泣きくずれた。女ながらに

気性のすぐれて強いお前たちの母上は、私と二人だけいる場合でも泣き顔などとは見せた事がないといつてもいいくらいだったのに、その時の涙はふくあとからあとから流れ落ちた。その熱い涙はお前たちだけの尊い所有物だ。それは今はかわいてしまった。大空をわたる雲の一片となつてゐるか、谷川の水の一滴となつてゐるか、太平洋の泡の一つとなつてゐるか、または思いがけない人の涙堂にたくわえられてゐるか、それは知らない。しかしその熱い涙はともかくもお前たちだけの尊い所有物なのだ。

自動車のゐる所に来ると、お前たちのうち熱病の予後にある一人は、足の立たないために下女に背負われて、——一人はよちよちと歩いて、——いちばん末の子は母上を苦しめ過ぎるだろうという祖父母たちの心づかいから連れて来られなかった——母上を見送りに出て来ていた。お前たちの頑^{がんぜ}是^ぜない驚きの目は、大きな自動車にばかり向けられていた。お前たちの母上はさびしくそれを見やっていた。自動車が動きだすとお前たちは女中に勧められて兵隊のように拳手の礼をした。母上は笑って軽く頭を下げていた。お前たちは母上がその瞬間から永久にお前たちを離れてしまふとは思わなかつたろう。不幸なものたちよ。

それからお前たちの母上が最後の息を引きとるまでの一年と七か月の間、私たちの間にははげしい戦いがたたかわれた。母上は死に対して最上の態度を取るために、お前たちに最大の愛をのこすために、私を加減なしに理解するために、私は母上を病魔から救うために、自分に迫る運命を男らしく肩に担^{たな}い上げるために、お前たちは不思議な運命から自分を解放するために、身にふさわない境遇の中に自分をはめ込むために、たたかった。血まぶれになつてたたかったといつて

いい。私も母上もお前たちも幾度弾丸を受け、刀きずを受け、倒れ、起き上がり、また倒れたらう。お前たちが六つと五つと四つになった年の八月の二日に死が殺到した。死がすべてを圧倒した。そして死がすべてを救った。

お前たちの母上の遺言書の中でいちばん崇高な部分はお前たちに与えられた一節だった。もしこの書き物を読む時があったら、同時に母上の遺書も読んでみるがいい。母上は血の涙を泣きながら、死んでもお前たちに会わない決心を翻さなかった。それは病菌をお前たちに伝えるのを恐れたばかりではない。またお前たちを見る事によって自分の心の破れるのを恐れたばかりではない。お前たちの清い心に残酷な死の姿を見せて、お前たちの一生をいやが上に暗くする事を恐れ、お前たちの伸び伸びて行かなければならぬ靈魂に少しでも大きな傷を残す事を恐れたのだ。幼児に死を知らせる事は無益であるばかりでなく有害だ。葬式の時は女中をお前たちにつけて楽しく一口を過ごさしてもらいたい。そうお前たちの母上は書いている。

「子を思う親の心は日の光世より世を照る大きさに似て」
とも詠じている。

母上がなくなった時、お前たちはちょうど信州の山の上にいた。もしお前たちの母上の臨終にあわせなかったら一生恨みに思うだろうとさえ書いてよしてくれたお前たちの叔父^{おじうえ}上にいって頼んで、お前たちを山から帰らせなかった私をお前たちが残酷だと思う時があるかもしれない。今十一時半だ。この書き物を草している部屋^{へや}の隣にお前たちは枕^{まくら}をならべて寝ているのだ。お前たちはまだ小さい。お前たちが私の年になったら私のした事を、すなわち母上のさせようとした